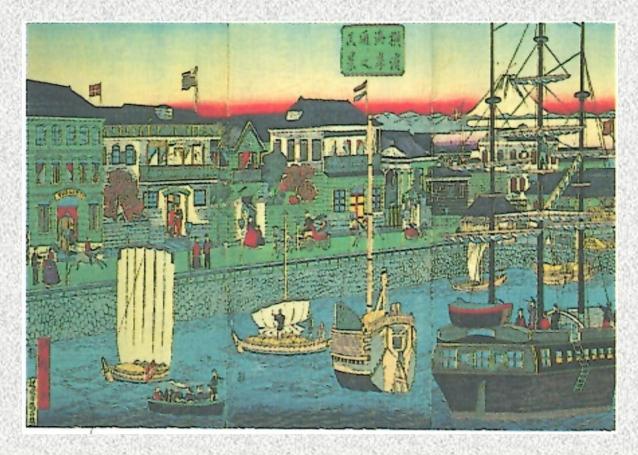
新しい視点で日本近代史を学ぶ新・日本の近代史 第14回

産業革命と大戦景気

(http://jugyo-jh.com/nihonsi/)

I、はじめに ~グラフから見える明治の経済~





▲岡谷製糸工場 長野

幕末~大正初期の貿易額と品目~高校教科書、8枚の円グラフ~

1865(慶応元)=幕末の状況、額は少ない 特定の品目に限定

|885(明治|8)=産業改革の入り口

輸出>輸入

1899(明治32)=産業改革の途上

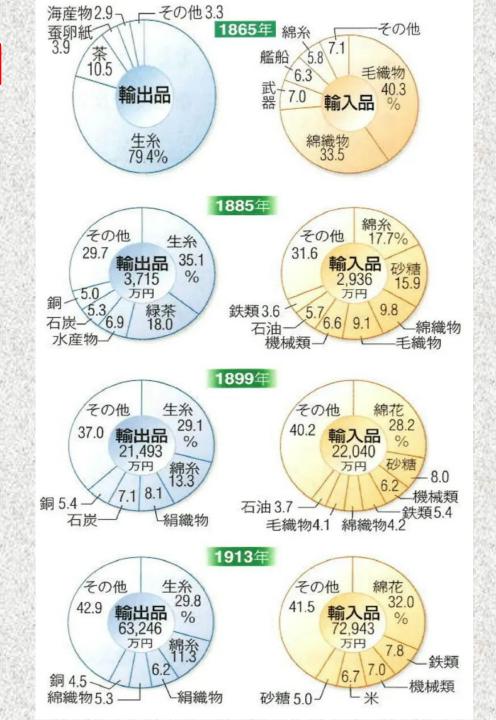
14年で輸出は5.8倍、輸入は7.5倍

輸出<輸入

1913(大正2)=産業改革の完了

28年で輸出は17.0倍、輸入は24.8倍

輸出<輸入



「絹」と「綿」に注目する

- (1)貿易総額の急増
- (2)輸出品の中心は一貫して生糸など絹関係
- (3)ドラスティックな変化=綿工業関係

65 輸出なし

輸入 ②綿織物⑤綿糸

85 なし

①綿糸 ③綿織物

99 ②綿糸

①綿花 ⑤綿織物

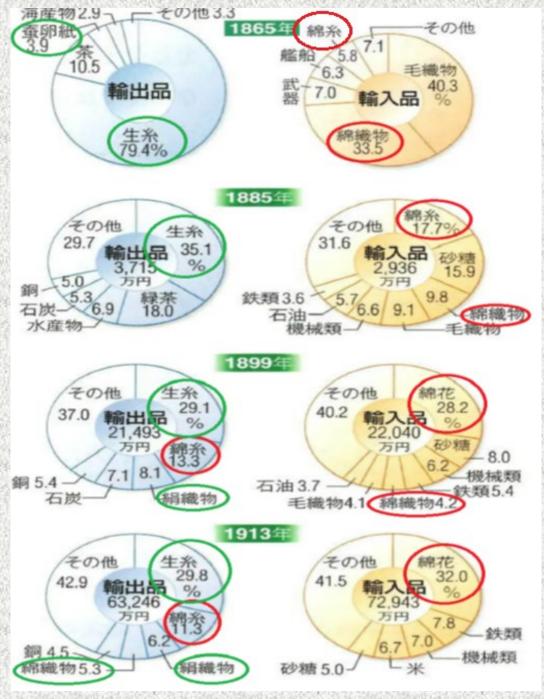
13 ②綿糸④綿織物

①綿花

綿貿易の変化=日本経済の構造変化を示す製品の輸入・原料農産品の輸出(植民地型)

⇒原料の輸入・製品の輸出(工業国型)

※綿織物・絹織物(織布)=工業製品 綿糸(綿紡績)・生糸(製糸)=半工業製品 綿花(栽培)・蚕(養蚕)=原料

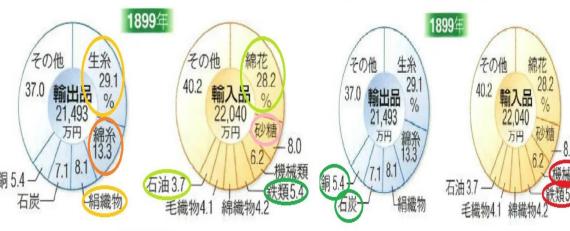


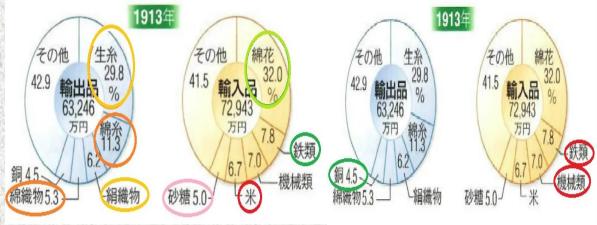
工業国型の貿易構造に

軽工業中心の後進資本主義型

- ①工業製品の輸出拡大生糸(+絹織物)→綿糸→綿織物
- ②工業原料輸入 綿花・鉄類・石油
- ③食料輸入 砂糖→米 (1913) =都市化の進展
- ⇒急速な工業化が進む。
- 4年進工業製品の輸入…機械類・鉄類
- ⑤原料輸出…石炭・銅
- ⇒重工業などの発達はすすまない。



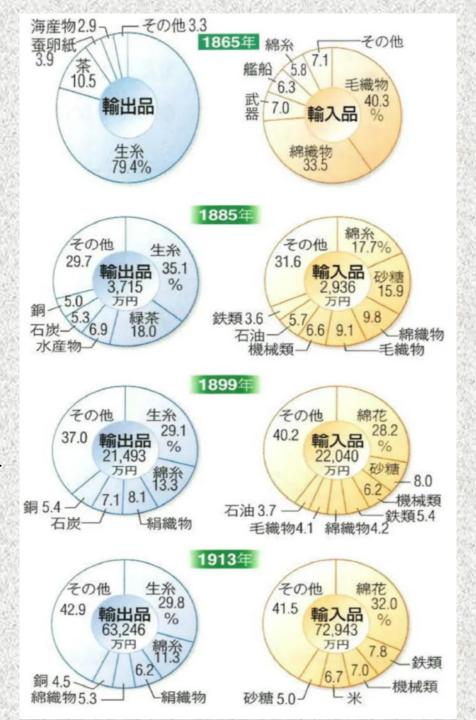




グラフから見えてくるもの~近代日本・経済の特徴~

開国により構造変化をせまられた後発国が、 しだいに工業国していく様子と問題点

- ①急速な貿易の伸展
- ②<mark>有力な輸出産業の存在</mark>と成長 生糸・緑茶+銅・石炭
- ③輸入代替産業の成長=明治初年の綿織業発展 輸入綿糸で機を織り綿織物の輸入を減らす
- ④貿易額の急増に対応しうる輸出産業の発展 つねに輸出額の約30%をしめる製糸業
- ⑤製糸業と綿紡績業中心の日本経済



Ⅱ、産業革命の開始とその特徴



日本初の兌換紙幣 (明治 | 7年)

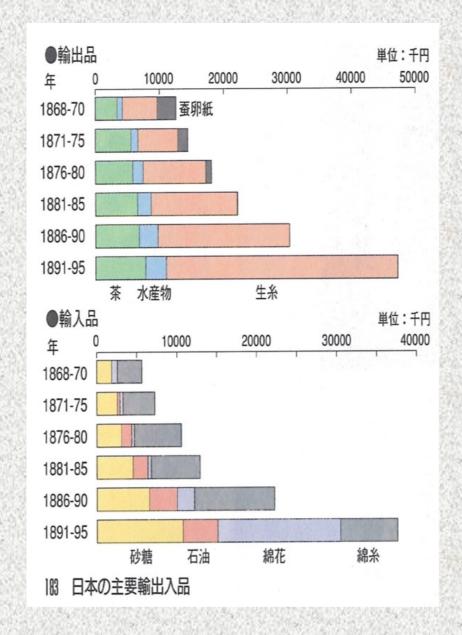
経済発展の基礎条件 ~内的発展と開港~

- ①江戸時代における経済発展・資本蓄積
 - =工業化がはじまりつつある社会
- ②欧米先進工業国から比べれば未熟な発展
 - =しかし相対的には不十分
- ③開港=不平等条約下の「自由」貿易
 - ⇒国内経済の急速な変化が強要される

輸出産業の急速な発展(製糸)

在来産業の解体(綿花など)

輸入代替産業の発展(綿織物など)



経済発展の基礎条件 〜強力な産業育成策〜

- ①維新政府による強いリーダーシップ
 - ⇒政府主導の産業育成政策(殖産興業政策)

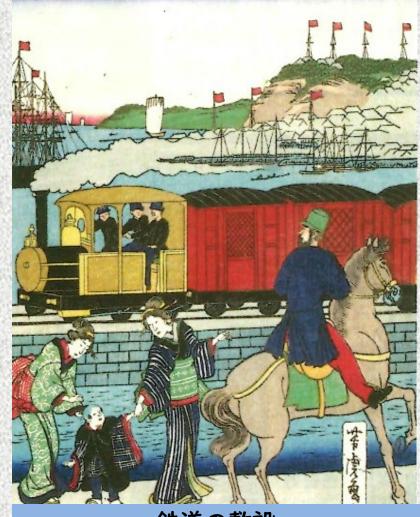
財政・租税・通貨・信用など産業基盤整備

官営事業(模範工場建設・インフラ整備など)

政商保護(三菱会社)

人材育成・開化政策(教育・御雇外国人・留学)

- ②秩禄処分…華族資本など民間資金の増加
- ③「不平等条約」という制約条件
 - ⇒国際収支の制約・産業保護政策の困難
 - ⇒外資への強い警戒感



鉄道の敷設

1880年代の変化 ~松方デフレと寄生地主制の形成~

- ①官営事業払い下げ⇒政商の成長 政府主導から民間主導に
- ②増税と、事実上の「増税」 実態として地租増徴⇒農村のダメージ
- ③<mark>銀本位制の確立</mark>・日本銀行の設立・ 国際的信用の拡大、貿易の安定化
- ④<mark>農村の不景気</mark>…インフレからの急転 地租・借金を支払えない農民の急増 自作農の没落⇒<mark>小作農の増加と都市への流出</mark>
- ⑤豪農の寄生的性格強まる= (寄生)地主化 農村(地主)の資金による投資本格化

農村・農民の犠牲の下、 近代化・工業化を進めた



寄生地主

新潟県新発田の大地主の蔵に収められる小作米。寄生地主とは、小作農民に土地を貸し付けて地代(小作料)をとることを主としている地主の総称

産業革命の開始 ~1880年代中期から~

製糸・綿工業・軍需を中心に展開

画期:大阪紡績の成功(1882·M15)

→以後、大規模紡績工場の創業相次ぐ

<特徴>

- ①民間企業の活発化 (←官営事業払下げ)
- ②華士族・地主・大商人の資金流入

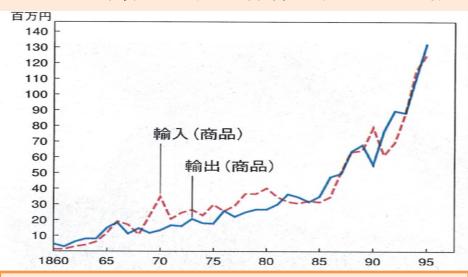
銀行預金や鉄道株⇒さらに紡績会社などに

- ③銀本位制の確立にともなう貿易の活発化銀暴落による実質値下げ=輸出に有利、輸入難
- 4松方デフレによる農村の破壊

⇒安価な労働力の創出



大阪紡績会社(現、東洋紡績。) 渋沢栄ーらが設立した紡績会社。 I 万500錘 という当時最大の近代的紡績工場として発足。



日本の貿易収支の動向

日本産業革命の後発的特質

海野福寿「日清・日露戦争」による

- ①政府による財閥系企業に対する保護・育成の下で行われた。
- ②先発資本主義国が到達していた技術水準を移植・模倣・折衷する、いわゆる<mark>「後発性利益」</mark>をうけ、短期間に行った。
- ③移植型技術の採用が特定の分野(鉄道・紡績業・鉄工業・軍需工業など)のみで行われ、波及的に展開に欠けた。
- ⇒多くの部門で旧来の生産形態が残り、農業もたち遅れた。

(犠牲にされた?)

④政府主導による国家資本・銀行資本·株式資本の動員が行われた。⇒独占の早期的形成を促す。

遅れて産業革命をすすめたことで「後発性利益」をうけ、 政府による強いリーダーシップのもとで選択的にすすめられた。 その結果、農業など多くの分野で旧来の形態が維持された。



海野福寿「日清・日露戦争」(1992集英社) 本シリーズは、多くの画像 や図版も用いられる一方、 その叙述にも学ぶところが 多い。

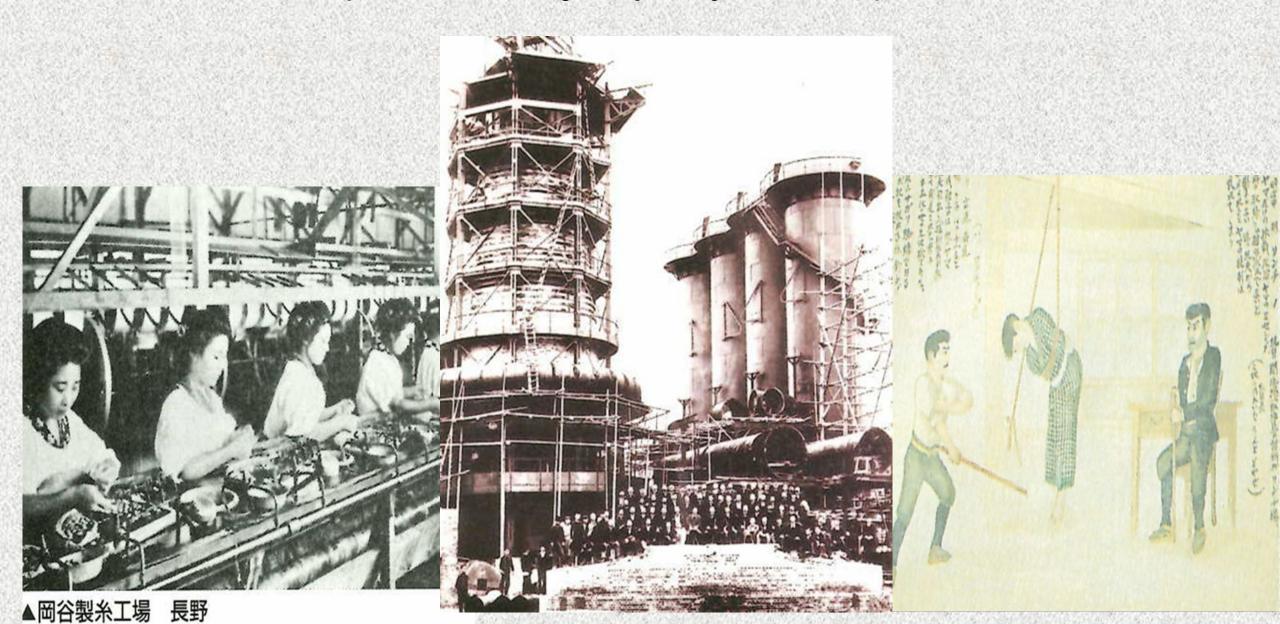
製品生産額別ランキング単位:100万円 武田晴人『日本経済史』

1914			1919		
綿糸	204	出・内	生糸	780	
生糸	158	出	綿糸	763	
鉄道	152	インフラ	小幅織物↓	453	
軍工廠	149	軍需	石炭	442	
小幅織物	92	内	鉄道	401	
石炭	80	旧エネ	小幅絹織物↓	397	
清酒	70	内	海運↓	378	
鉄鋼	69	入	鉄鋼	372	
非鉄金属	64	入	軍工廠	315	
電力	57	新エネ	船舶 ↓	312	
小幅絹織物	52	内	広幅織物	312	
製糖	49	内消費	清酒	240	
原動機	29	入	電力	183	
製紙	29	内文化	製紙	151	
毛織物	28	内消費	毛織物	122	
印刷	26	内文化	肥料	111	
小麦粉	25	内消費	製糖	104	
肥料	25	入化農	↑撚糸	101	
広幅織物	20	出	非鉄金属	98	
		大戦	景気		

1914年(産業革命完成時)のランキングの特徴

- ① 綿糸・生糸の二大産業が I 位・2位を占め(さらにその関連産業である小幅織物・小幅絹織物・広幅織物もベスト20入りしている)
- ②三本柱のもう一つの極である軍需産業の中心である<mark>軍工廠</mark>が鉄道に次いで4位となっている。関連産業の鉄鋼・非鉄金属もベスト10。
- ③小幅織物・小幅絹織物や清酒といった<mark>内需関連の産業が約半数を占める</mark>。
- ④新たなエネルギー源である電力が10位
- ⑤隣の1919年と比べて<mark>その数字がきわめて小さい</mark> ことにも注意。

皿、日本の産業革命の諸相



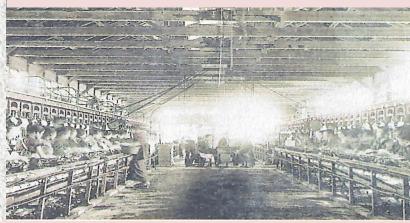
製糸業と養蚕・絹織物

養蚕業…傾斜地などで桑を栽培、カイコに 桑を与え飼育、繭をつくらせる。

農家の副業として全国に拡大、農村を支える。 製糸業…繭から生糸を紡ぎ、絹糸をつくる。 中小工場中心、貧農の子女を低賃金無権利で →生糸の多くは輸出、アメリカが中心 絹織物業…生糸をもとに絹織物を生産 西陣織、結城紬など→国内富裕層中心 福井などの羽二重→輸出向け

純国産の産業=輸出分はすべて貿易黒字に ⇒近代日本の屋台骨を支えた産業





岡谷製糸工場

製糸業は、簡単な道具をもちい、女工の熟練が重視される産業である。 比較的参入が楽で、中小が中心。 景気の動向に左右されることが多く、 女工や農家にしわよせされた

製糸業の実態=基本は女工の手作業

- ①器械製糸…国産の<mark>道具(「似非機械」!)</mark>を使用 マニュファクチュア(工業制手工業)レベル
 - ⇒女工の手工的熟練に強く依存する
- ②小資本(女工100人以下)でも導入可能
 - ⇒<mark>中小企業が中心</mark>・品質向上が課題
 - cf.郡是製糸…大規模・高品質化をめざす。
- ③発展の理由
- ・政府系金融を背景とする地銀・売込商の資金供給
- ・農家出身の女工の低賃金労働
- ・養蚕農家からの低価格での原料繭買付
 - ⇒価格の変動を養蚕農家に転嫁する傾向
- ④品質向上…女工の競争と、農民への改良の強要

女工の技と、養蚕農家の努力の上に発展



▲岡谷製糸工場 長野

器械製糸

従来の製糸器に洋式機械の機能を取り入れたもの。繰枠を駆動軸で連結して水力や蒸気力で均一に回転させ、煮繭をボイラーによる蒸気湯わかしにするなどの改良を加えた道具レベル

綿工業の発展=大規模工場設立

- ①輸入代替産業として発達→小規模の官営工場=利益上がらず
- ②1882(明治15) 大阪紡績(株) 設立
 - ・一万錘以上の最新鋭機を使用・大規模工場
 - →大規模紡績工場の操業相次ぐ

「大阪は日本のマンチェスター」

- ③24時間、二交代制のフル操業で効率を上げる 低賃金・長時間労働で利益を上げる
- 4海外産(中国・インド)の安価な原料使用

大規模化・最新機械の導入、24時間2交代制による低価格を武器に国際競争にのりだす



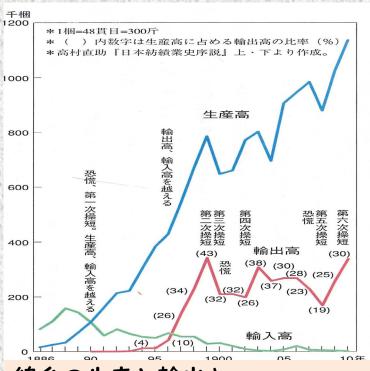
大阪紡績会社

最新鋭のリング紡績機は力仕事が少なく操作も簡単で容易であったことから低賃金の女性・未熟練労働者を 大量に投入することが可能となった。

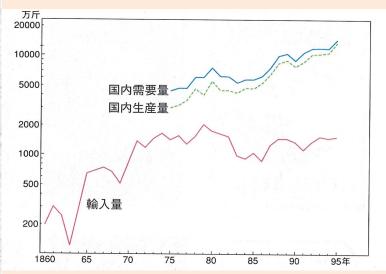
綿工業の発展 生産と輸出の急拡大

- ①生産高の急激な拡大
 - →1890生産高が輸入高をうわまわる
 - →1897輸出高が輸入高を超える。
- ②輸入代替産業から、しだいに生糸と並ぶ輸出産業へ 朝鮮市場(当初は輸入品を持ち込む)
 - →しだいに中国・東南アジアなどアジア市場へ
- ③外国産の綿花を使用
 - ⇒国内の綿花栽培の壊滅
 - ⇒大量の輸入が必要 (対インドでは入超がつづく)
- ④綿織物業 (綿布生産) なども発展
 - →輸入綿布(「金巾」)を圧倒、輸出産業に

綿工業の発展は輸入増=外貨流出と表裏一体 (日本貿易の構造的な問題)



綿糸の生産と輸出入



国内綿布市場の推移

女工の職場=苛酷な労働環境

- ①未成年の少女が中心
- ・紡績…都市の貧困層が中心、のち農村へ 悪評の広がり⇒募集難に
 - →のち沖縄出身者や朝鮮出身者が増加。
- ・製糸…貧農の子女を前貸金でしばり雇用 口減らしの面も

「うちが貧乏で、十二の時に、売られてきました、この会社」

②長時間労働…12時間以上

引用例:6時から6時、昼夜二交代制 | 週間交替。

製糸工場の例: |日|4~5時間、長いときは|7~8時間

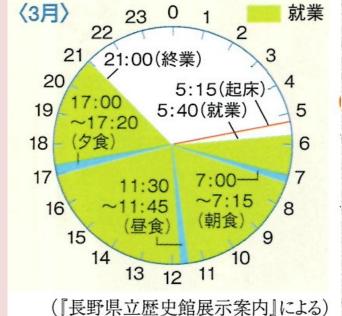
③劣悪な労働・生活環境

高温多湿、綿くずの飛散、労災発生 食料も不十分→脚気や結核が蔓延 「工場は地獄、主任は鬼で、回る運転、火の車」



大阪紡績での女 工の年齢構成 20歳以下が6割、 |4歳未満も 15%をしめる。 実態はさらに厳 しいとの指摘も ある

日



女工たちの職場

~離職・健康破壊・抵抗

④寄宿舎生活=隔離され監視された生活

一人あたり0.7~1畳分、布団の共有も。

「篭の鳥より、監獄よりも、寄宿暮らしはなお辛い」

⑤大量の離職・逃亡者・健康破壊

ある例:退職者2162人

→逃走828人、病気帰休118人、死亡者7人

6日本初のストライキ

1886山梨・雨宮製糸

「女工女工と軽蔑するな、女工は会社の千両箱」



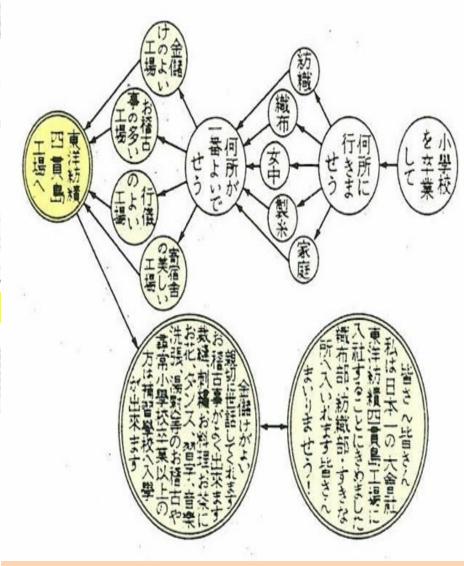
一日の日は午前だけ仕事をして午後は ・ 一日の日は午前だけ仕事をして午後は ・ 一日の日は午前だけ仕事をして午後は ・ 一日の日は午前だけですがは現れる。 ・ 一日の日は午前だけですがは現れる。 ・ 一日の日は午前だけですがは現れる。 ・ 一日の日は午前だけですがは現れる。 ・ 一日の日は午前だけですがは現れる。 ・ 一日の日は午前だけですがはれる。 ・ 一日の日は午前だけですがはれる。 ・ 一日の日は午前だけです。 ・ 一日の日は午前だけです。 ・ 一日の日は午前だけです。 ・ 一日の日は午前だけ世事をして午後は ・ 一日の日は午前だけ世事をして午後は ・ 一日の日は午前だけ世事をして午後は ・ 一日の日は午前だけ世事をして午後は ・ 一日の日は午前だけ世事をして午後は

のできるなどのなども国際には無知ないのだらのできるなどのなども国際には無知ないのでは、本代ののなども国際には無知ないのだらのできるとがあるなどんでした。 を申して限り立した実にから後と云人者は の一度も無を共れたことがあるなどんでした。 を持ちまであったが響像へ上げられてした。 時の新聞記事(時事新報:工女虐待事件を記し4:映画「あゝ野麦峠」

埼玉県の織物工場を脱走した工女ツヤの証言(時事新報の記事)

彼女の生家は石川県にあり、半商半漁の貧家の三女で、姉たちも早くから出稼ぎに出ていた。一五歳になったツヤは、一九〇一年秋、桂庵(周旋人)の、二年半年季で給金一八円、月に三度の休暇、東京見物、小遣い銭支給、といった甘言につられて織物工場へやって来たのだった。着いてみると、聞くと見るとでは大違い。休暇、見物はおろか、ノルマを消化できない先輩工女の裸の折檻、長期間くり返せば、やせ細り衰弱してしまう。(中略)

紡績工場には形ばかりの寄宿舎があったが、製糸工場にはいまだ寄宿舎はなく、工場の一角、一人あたり一畳という狭い空間を区切って宿舎にあてるのが通例である。工場主から貸与される二人につき上下一枚ずつのふとんにくるまり、冬ともなればともに抱き合って寒さをしのがずにはいられない状態だった。食事も貧しい。「副食物ハ味噌汁ト漬物トヲ常例トシ、時々野菜ヲ給ス。 稀二乾魚ヲ与フルコトアリ」という内容には、栄養バランスなどの配慮はない。それさえも追い立てられるように済まし、食後の休みもないまま機械の前に立たねばならない。(海野前掲書)

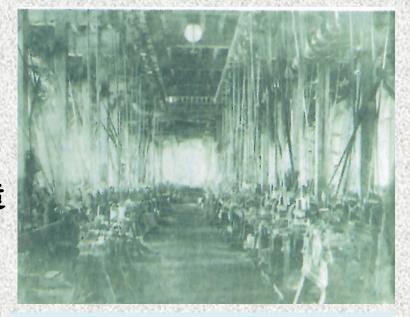


女工の募集広告(東洋紡四貫島工場) 苛酷な労働条件が話題になるにつれて、 しだいに女工たちの募集が困難になっ ていった。

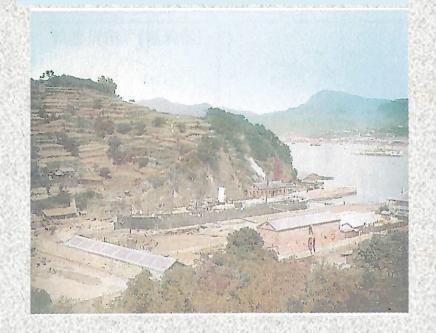
三本目の柱=軍需産業

日本の軍国主義化とくに日清・日露両戦争で発展 政府(軍)の発注=国営工場(軍工廠)が中心

- ①砲兵工廠・海軍工廠…大砲や弾薬・艦船などを製造
- ・幕府などの施設を引き継ぎ発展 東京・大阪・呉・横須賀など
- ・洋式技術の移植→模倣→定着を基礎に発展
- ・輸入代替産業の側面、世界レベルである必要。
- ・鉄や金属など素材面での弱点
- ②海軍工廠・造船所など 日露戦争における艦船は基本的に輸入に依存 →1905年頃には世界水準に(軍艦の国産化へ) 長崎造船所など…払い下げを受ける形で成立 軍の委託を受け艦船なども製造
- ③成長に伴い製鉄業・機械工業の発展を牽引 ⇒技術者・職工OBら、下請け・関連企業創設



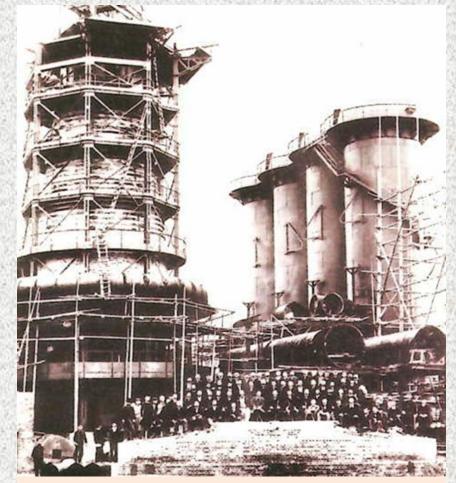
大阪砲兵工廠(上)と長崎造船所立 神ドック(下)



八幡製鉄所の操業開始

- ◎製鉄業=軍需の要請が背景
- ①1883田中長兵衛、釜石鉱山を獲得
 - ⇒釜石田中製鉄所創設
 - →1894コークス銑産出に成功=経営安定に
- ②1900官営八幡製鉄所の操業開始
- ・日清戦争の賠償金などが原資
- ・ドイツの技術、釜石の経験も導入
- ・中国の原料(大冶鉄山・撫順炭鉱など)を使用
- ⇒1908生産目標額達成に
- ③民間製鋼所の設立=財閥資本

重工業=陸海軍工廠と官営製鉄所中心 →民間…軍事関連中心に追随的に形成



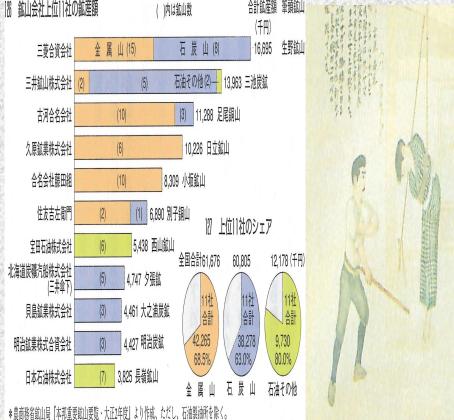
八幡製鉄所

1897年,福岡県八幡に設置された,日本初の本格的官営製鉄所日清戦争の賠償金などをもとに'97年着工。中国湖北省の大冶鉄山の鉄鉱を原料とし,1901年操業開始。重工業部門の産業革命の中心的位置を占めた。

鉱山・炭鉱業

- ◎鉱山・炭鉱…鉄や非鉄金属の原料を採掘
- ①1880~払い下げにより政商・財閥の経営に →1913年には優良鉱山はほぼ大企業の支配下に
- ②銅と石炭が中心→主要な輸出産業に
- ③労働災害の頻発…落盤・ガス爆発・塵肺珪肺など 福岡での炭鉱事件の死者 469人/年(1905~12)
- ④前近代的な労働環境=飯場制度・納屋制度
 - …請負人が募集・生活管理・作業監督などを請負う →前貸金・物品貸与・賭博、リンチなどで支配
- ⑤公害問題の発生=足尾鉱毒問題・別子煙害事件など

前近代的・非人道的な労働環境が凝縮した職場

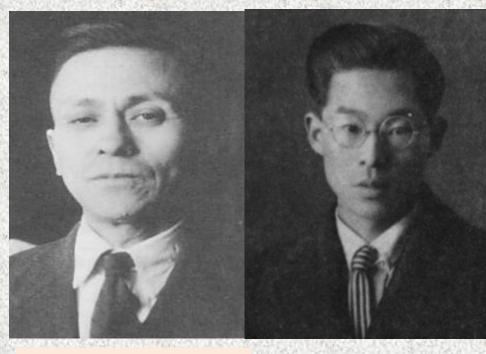




採炭は二人一組で行われる。先山が石炭を採掘 し、後山がそれを運び出した。後山は女性であ ることも多かった。

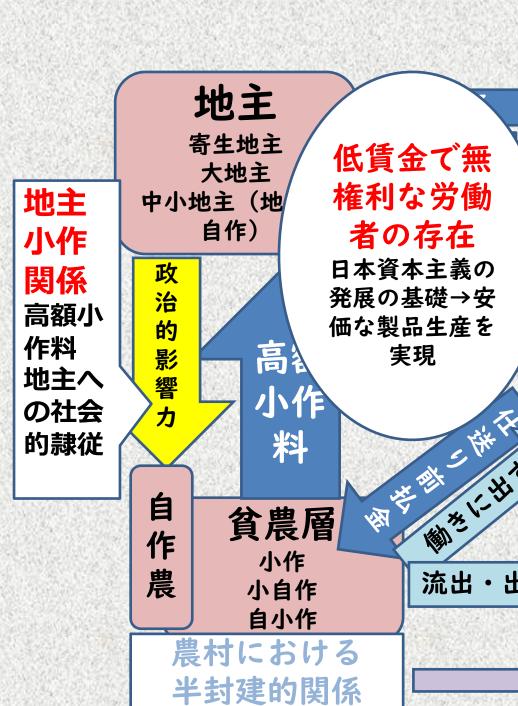
産業革命期の経済構造~ある説明

- ①背景:農村における地主・小作関係
- I)農民:生活困難→出稼ぎ・家計補充的労働力を放出
- 2)地主:これにより高額小作料(寄生地主制)を実現
 - →資金を鉄道や工場などに提供
- 3)資本家:低賃金無権利の労働者(主に女工)を確保
- ②実態:安価な工業製品を生産
- 1)地主資本などの導入
- 2)インド以下的低賃金の女工により安価な製品を生産
- ③結果:貧しい農村、都市の未発達
- 1)需要が小さく、国内市場がせまくあまり売れない
- 2)海外市場をもとめる衝動(経済の軍国主義的性格)



山田盛太郎(1897 ~80) 戦前の講座派マル クス主義の中心と して活躍、日本経 済史研究に大きな 役割を果たした 猪俣津南雄(1889 〜42) 労農派マルクス主

労農派マルクス主 義の中心。日本経 済・地主制の資本 主義的側面を重視 した



資本家 工場主 低 賃 金 工場労働者 (製糸・紡績な 翻卷上批本 賃金 勤 流出・出稼

生糸綿糸な

安価な 工業製

> 安さを武器 に海外市

に進出

世界市場 (アメリ カ・中国 などアジ ア)

海外進出への欲求 =日本経済の軍国主義 的性格

劣

悪

な

条

件

都市貧困層

人"。 炭鉱鉱山 ・タコ部屋 労働など

国内市場 の狭さ

市場を海外 に求める

貧窮の背景としての 高額小作料

秋田県平鹿郡醍醐で水田1町5反の小作経営する農家の経営収支。

- ①収入が増加にもかかわらず赤字が拡大。
- ②肥料などで米は増収、副業収入も増加。
- ③米価高騰で円ベースの収入は増える。
- ④収入に対する小作料は44~46%と固定化(現物小作料?)、増収の多くが吸収される。
- ⑤<mark>赤字分がどのように補填されるのか</mark>、 気になるところである。

借金の拡大?⇒出稼ぎ・身売りなどに

※この時期、東北では三陸大津波、冷害による凶作などが相次ぐ。

秋田県平鹿郡の小作農の経営収支

		1890	1899	1908
収入	*	128	176	318.6
		24石	25石	27石
	副業	20	30	50
	雑収入	10	75	30
	計	158	281.4	398.6
	税金(国県村)	3.341	5.357	9.35
	小作料	72	124	175.5
	肥料	12	22.5	34
	種子	3	5.4	9
	家畜飼料	3	5	10
	食費	57.56	116.04	146.19
	その他支出	19.75	36	52.5
	計	170.651	314.297	436.54
	収支残差引	-12.651	-32.897	-37.94
収入に占める割合	税金	2. 1	1.9	2.3
	小作料	45.6	44.1	44.0
	経費	11.4	11.7	13.3
	食費	36.4	41.2	36.7
	支出計	108.0	111.7	109.5

海野福寿|日清・日露戦争」p131

村の57%(420人)が水田無所有。5反以下の零細農が | 4%。 3%(20人)の5町歩所有の地主の下に71%の農民が小作経営 をしていた(海野p131)

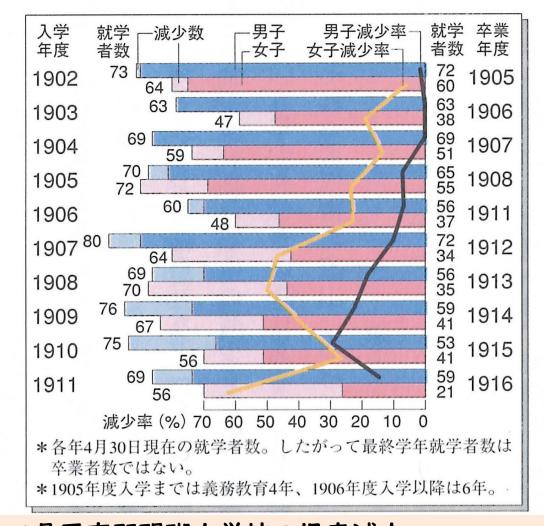
村を離れる子どもたち~女工募集の場面から~

人身売買の一種

凶作地窮民の間を説いてその女子を買い取らんとする一種の悪漢各地より入り込める由は(中略)岩手におけるがごとく甚だしきはなし。(中略)

同村に関東地方の機業者とか唱うる者、女工募集のためとて入り来たり、窮民について、その女子を出稼ぎせしめんことを勧めたる結果、窮民の中には一事の急をしのがんと最愛の子女をして5年ないし8年の契約にてその募りに応ぜしめその報酬としてはわずかに手取り2円ないし5円を得たるが多しとぞ。これらは表面女工募集との触れ込みなれど、その実新占領地などに醜業婦として売り飛ばさるるが少なからず、ほとんど純然たる一種の人身売買が行われるるあり。

(杉村楚人冠『雪の凶作地』朝日新聞06/2/15)



秋田県平鹿郡醍醐小学校の児童減少 減少者の多くは転出。「異動通知書」によると、 男子は北海道出稼ぎ、女子は東京キャリコ製織会社、 東洋モスリン製織会社などへのエ女出稼ぎが多い。 一九〇五年以降急増する。(海野前掲書p134)

IV、大戦景気~農業国から工業国へ



農民たち、大正時代、鹿児島県桜島で撮影

日本工業倶楽部屋上に掲げられた「鉱夫 と織姫」像

第一次世界大戦「欧州大戦」(1914~18)

帝国主義列強の対立によりおこった最初 の世界戦争

植民地拡大をめぐって、ドイツとイギリスの対立と、バルカン半島でのドイツとロシアの主導権争いが原因。

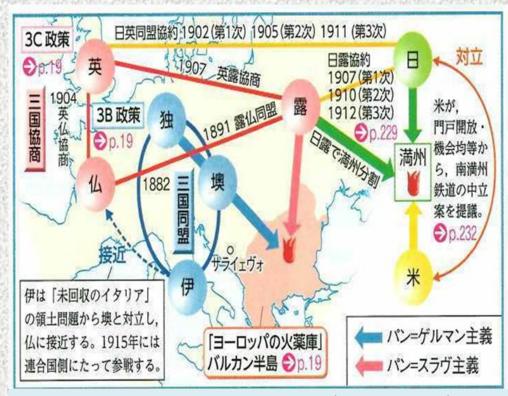
三国同盟と三国協商の対立の中で、1914年のサライエ ヴォ事件を契機に大戦が勃発した。

最終的にはドイツ・オーストリアなど4カ国と、イギリス・フランス・ロシア・アメリカなど27カ国の連合国との戦争に拡大した。

日本は日英同盟を理由に連合国側に参戦,山東省のドイツ利権・ドイツ領南洋諸島を奪い,二十一カ条要求をするなど中国支配を強化した。

戦争は長期化し、初め圧倒的に優勢だったドイツ側はしだいに不利となり、「17年アメリカの参戦」、ロシア革命などがあり、18年ドイツは降伏した。翌、19年パリ郊外のヴェルサイユで講和条約が調印された。

(『旺文社日本史事典 三訂版』)



おもな戦場はヨーロッパ(欧州戦争)

協商国(イギリス・フランス・ロシア) 日本・イタリア・アメリカ・中国他計27 VS.

同盟国(ドイツ・オーストリア) +オスマン帝国・ブルガリア

欧州の大禍乱は大正新時代の天佑(#上馨) ~日本にとっての第一次大戦~

- ①主戦場はヨーロッパ大陸
 - →軍事行動は限定的。人的・物的負担は軽微
- ②戦時需要に対応し輸出拡大、未曾有の好況に
 - →大戦景気の発生
- ③税収増→国際収支と財政の「双子の赤字」が解消
 - →軍備拡張に対する財政上の制約の消滅→軍拡へ
 - =国内の政治的対立、沈静化に
- 4列強の間隙をぬい、中国への勢力拡大をはかる
 - →二十一か条要求=中国民族運動の最大の対象に。
- ⑤極東の憲兵から五大国の一つに

(武田『帝国主義と民主主義』)

大戦は、政治・経済の難問を一挙に解決 させる麻薬でもあった。



山東半島への上陸 連合国側で参戦した日本軍は、ドイツの 中国における軍事拠点山東省・膠州湾を 攻撃・占領。1915年、21か条要求を中 国側に突きつけた

第一次大戦の経済的意味 (1)輸入の停止

ヨーロッパからモノが来なくなった!

- ①大戦不況の発生=「松方デフレ以来の不況」
 - 1914下半期:輸出25~30%減(対前半期)
 - 生糸30%減、綿糸25%減、米価(前年比)32%減
- ②輸入代替産業の発達「まがいものでも売れる
 - 化学工業(染料・肥料)・金属・機械(時計)
- ③アジア諸国・ロシアなどでの物不足
- ⇒綿糸・綿織物などヨーロッパ製品の代替需要

国内外に、巨大な代替需要が発生



新兵器の登場

第1次大戦には、機関銃、飛行機、飛行船、 タンク、毒ガスなど新兵器が次々に登場。国 力を総動員して戦う<mark>総力戦の色彩</mark>を強めた。

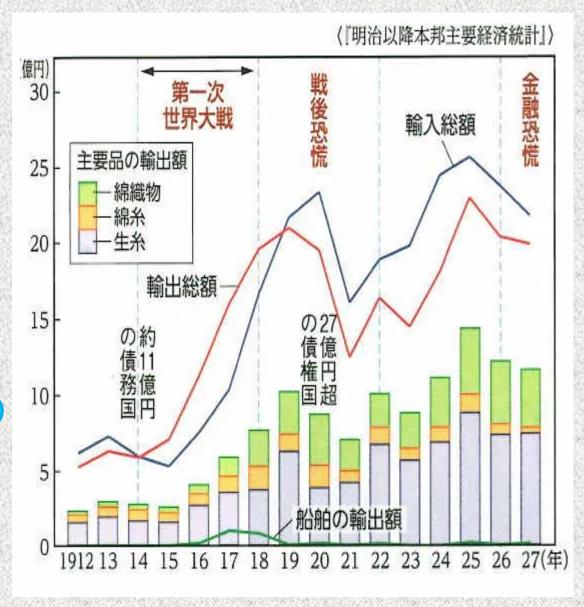
第一次大戦の経済的意味 (2)輸出の拡大

- ①ヨーロッパでの物資不足
- ・軍需物資…銅など金属、兵器・艦船など ⇒重工業・鉱山業の発展
- ②アジア諸国への輸出拡大・原料の輸入
 - ・綿工業の発展・綿花などの原料輸入
- ③アメリカの好景気=世界最大の経済大国へ
 - ・絹製品などへの需要=製糸業などの拡大
- ④貿易の活発化=船舶不足の深刻化

(←ドイツ=無制限潜水艦作戦の開始)

- ・船運賃の暴騰⇒海運業の隆盛
- ・造船業の隆盛

日本の製品・船舶が世界に



第一次大戦の経済的意味 (3)大戦景気の発生

①商品価格の急騰=物価指数 開戦前の2倍に 鋼材:8倍、化学製品:10倍前後に上昇

②企業の高い収益

綿紡績:資本金利益率10倍超(他も30~60%)

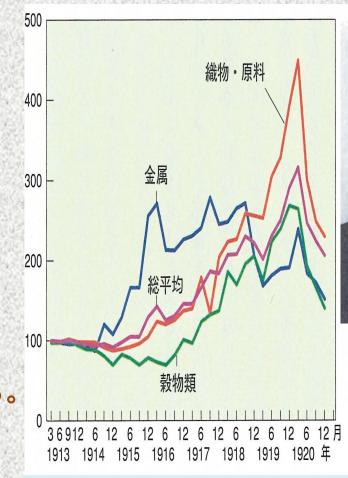
③投資熱…株式市場などへの資金流入 過熱=バブル化 財閥株の一部公開

4積極的経営の出現

鈴木商店…新たな産業分野への積極的な投資をすすめる。

⇒日本一の貿易商社に

久原房之助(⇒日立製作所・日本鉱業)



物価指数



金子直吉 鈴木商店の番頭 「天下三分の計」 を営で三井・三菱 経営で三井・三菱 両財閥に対抗した

重化学工業など新たな産業が日本経済を牽引 他方、大量の負債を発生し戦後不況も牽引

鈴木商店の挑戦 と挫折

番頭・金子直吉 による独裁的経 営 傘下の各社は財閥などによって山分けされる

1877年頃	●鈴木岩治郎、肩鈴木商店(砂糖商)を開業
1886	●金子直吉入店
1894	●岩治郎没、未亡人よね、柳田富士松・金子直吉
	の2番頭に経営を委ねる
1900	●台湾の樟脳販売権を獲得
1902	●合名会社鈴木商店に改組(資本金50万円)
1903	●大里製糖所設立 (1909年に大日本製糖に売却)、
	こののち各種関係会社を設立し、貿易部門も総
	合商社化し、一大コンツェルンに成長
1920	●合名会社鈴木商店増資(5000万円)
1923	●貿易部門を分離して株式会社鈴木商店(資本金
	8000万円、内払込5000万円)を新設、鈴木商店
	は鈴木合名会社(資本金5000万円)と改称
1927	●鈴木商店·鈴木合名、倒産

直 系	会	社	傍	系	会	社
会 社 名	設立年月	払 込 資本金 (万円)	会 社	名	設立年月	払 込資本金(万円)
天満織物	1887.3	524	第六十五	i銀行	1878.11	625
日本製粉	1896.9	1,230	日本セン		1888. 3	500
神戸製鋼所	1905.9	2,000	東京毛統		1906.11	1,600
日本商業会社	1909.2	500	東亜煙草東洋製料		1906.11 1907. 2	580 2,203
浪華倉庫	1917.6	500	帝国麦洲		1912. 5	550
帝国人造絹糸	1918.2	875	朝鲜鉄道	í	1916. 4	1,765
帝国炭業	1919.5	1,000	日本樟腸	Ä	1918. 2	675
合同油脂グリセリン	1921.4	500	信越電力	J	1919. 5	3,200
クロード式窒素工業		1,000	国際汽		1919. 7	7,715
				セルロイ	F 1919. 9	1,000
豊年製油	1922.4	1,000	旭石油		1921. 2	930
その他25社		2,670	その他1	8社		2,524
(35社計)		11,799	(30社語	+)		23,867
65社総計 35,666	6	*1926年	現在で払込資	資本金が50	00万円以上の	会社のみ

海運業・造船業の隆盛 「船成金」の登場

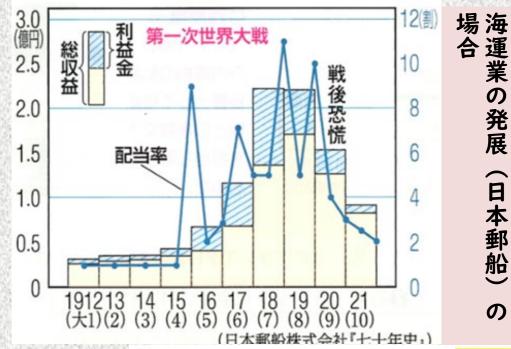
大戦は貿易を活発化

- ①船舶不足の深刻さ
- ②船舶需要の高まり
- ③航行リスクからくる運賃の急騰 (ドイツによる無制限潜水艦作戦の開始)

海運業や造船業の隆盛=「船成金」の出現

- ・船に食料を満載し、船ごとイギリスに
- ・同じ設計図で船を大量生産

船舶運賃の高騰は、物価へ転嫁 され、国民生活を圧迫した



労働者数を 倍前後の伸びを示す の展 ずれ

	1913(A)	1918(B)	B A(倍)
造船業者数	5	52	10
造船工場数	6	57	10
造船台数	17	157	9
工場労働者数	2万6139	10万7260	4
建造汽船総トン数	5万1525	62万6695	12

(『日本金融史資料・明治大正編』)

湾合の発展

(日本郵船)

0

「成金」の時代

①「成金の時代」=好景気に伴う大量の収益が 経営者に

薬成金・鉄成金・船成金など

- ・内田信也…六十割の配当実現・総資産6000万円
- ・「大阪の芸者を借り切って朝鮮に送り込む」(久原)
- ②投機ブーム=株式や商品先物市場などに
 - 一攫千金の「株成金」の登場も

野村徳七 (⇒野村證券)、岩本栄之助

- ③造船などでの熟練工への需要の高まり 「成金職工」も出現
- ④紡績や製糸のベテラン工女の引き抜き合戦 →高賃金とリンチ

(背景:スペイン風邪の大流行による大量死?)



大きな損失を出し自殺する本栄之助の寄贈による。岩本は株相場で大量の資金を得た岩大阪中央公会堂



…。その風刺画くなったろう」といったとの噂、百円紙幣を燃やして「どうだる成金が花街で「靴を探すため

企業の新設・拡張、投機ブームの裏側で

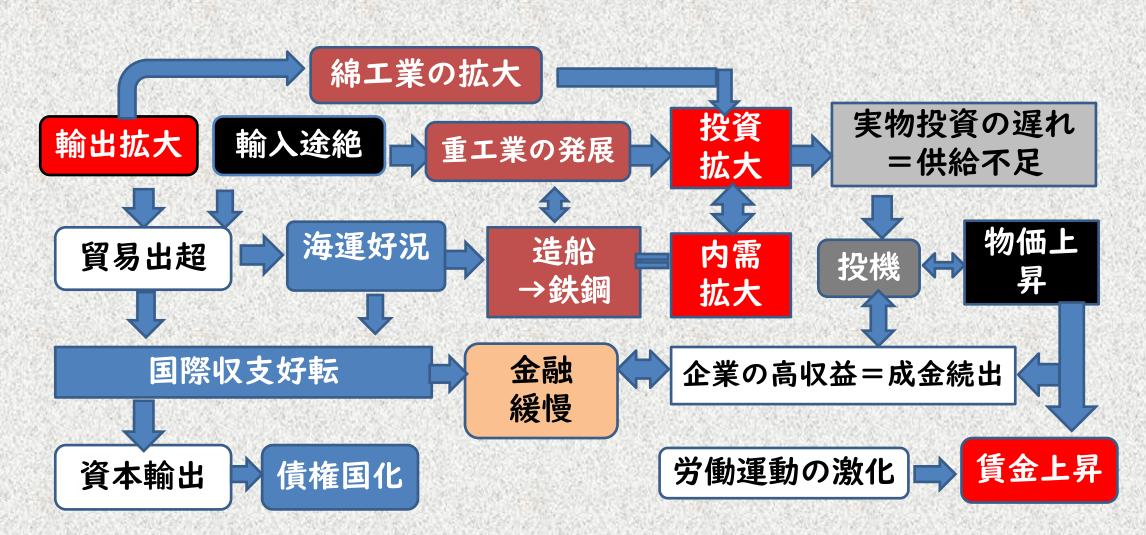
- ①ヨーロッパ製品の輸入の途絶
- ⇒国内で代替できない、不足する物資の存在
- ・高品質の紡績機・発電機など
- ・大量・高品質の鉄鋼や金属 鋼材の自給率は約1/3程度・他は輸入
- ②アメリカの参戦⇒鉄・機械を輸出禁止に =鉄飢饉の発生 日米船鉄交換(1918)
- ③需要増を雇用拡大・労働強化で乗り切る ⇒生産性の悪さ+労働環境の悪さ
- 4発電力不足による操業困難の発生
- ⑤事業拡大や設備投資の困難 ⇒余剰資金を株や商品先物市場などに投入
- ⑥戦争終了後の大量投資=過剰投資に



いくら札束を積んでも、鉄鋼や金属は売れないよ! (BY アメリカ) アメリカは1917年、第一次世界大戦に参戦した

日米船鉄交換…日本が提供した船のトン数と同量の 鉄鋼の提供で合意

(大戦景気) 大戦景気のメカニズム _{武田晴人「日本経済史」より}



V、大戦景気が変えた日本 ~工業中心・都市中心の社会に



~製品

きさに注目!

大戦景気数字の変化の大:確認しよう ランキングから

1;	914		1919	生糸は5倍弱、		
綿糸	204 出・内	生糸	780 出 <	綿糸は	:4倍弱	
生糸	158 出	綿糸	763 出・内	鉄追	/	
跌道	152 インフラ	小幅織物↓	453 内	綿糸	JO出・F	
軍工廠	149 軍需	石炭	442 旧エネ	電力	☆←工:	
小幅織物	92 内	鉄道	401 インフラ	京 軍需関	連など	
石炭	80 旧エネ	小幅絹織物↓	397 内		沿など船成	
青酒	70 内	海運↓	378 好況		登場	
跌鋼	69 入	鉄鋼	372 入×軍 ◢		AI:	
非鉄金属	64 入	軍工廠	315 軍需	軍工廠	208 軍縮	
電力	57 新エネ	船舶 ↓	312 好況出軍	井川 少げ	100	
小幅絹織物	52 内	広幅織物	312 出	広幅織物は洋	服・輸出にも	
製糖	49 内消費	清酒	240 内消費	対応・小	幅は和服	
京動機	29 入	電力	183 新エネ	₹		
製紙	29 内文化	製紙	151 内文化	↑小麦粉↓	146 内消	
毛織物	28 内消費	毛織物	122 内消費 >	四彩	132 内農美	
印刷	26 内文化	肥料	111 入×化農	1	400 111	
小麦粉	25 内消費	製糖	104 内消費	■ 電力消費	の急拡大	
巴料	25 入化農	↑撚糸	101	■ 国産化学服	料の使用	
広幅織物	20 出	非鉄金属	98 入×軍	非		

凡例

<製品名>

赤系統:重化学工業

緑系統:綿系統工業

黄系統:絹系統工業

<数字>

ゴチ:大きな変化

着色:顕著なもの

<備考>

出:輸出関連

入×:輸入停止

内:内需関連

単位:100万円

出典:武田晴人『日本経済史』

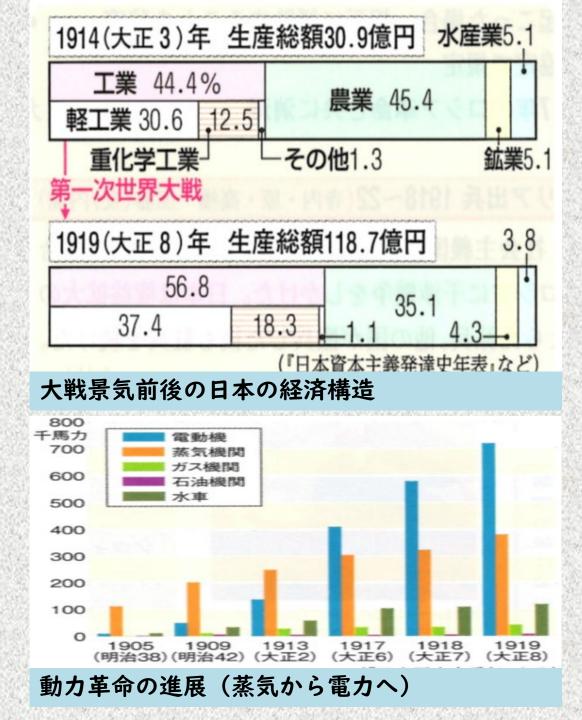
大戦景気

1920年代・軍縮

農業国から工業国に

- ①生産総額の急増=五年間で4倍増
- ①農業中心から工業中心の産業構造に 生産総額の過半数を工業が占める 農業生産は、1/3強程度に後退
- ②重化学工業の比率の高まり 工業に占める割合 28%⇒32%に 繊維業・女工中心の工業からの脱却
- ③動力革命 蒸気機関中心から電気エネルギーへ

日本は大戦景気を経て、 農業中心の農村型社会から 工業中心の都市型社会へ一変する



労働者階級の変化 女工・職工⇒男子・熟練労働者へ

- ①鉱工業労働者の急増 約100万人⇒約150万人へ 労働力需要の高まり
 - ⇒都市雑業層・農村滞留層の割合の減少
- ②大工場・男子熟練労働者の増加女エ=女子若年労働者中心からの脱却出稼ぎ・家計補充⇒生活の中心に
- ③大企業と、中小零細企業との格差拡大 労働者内の格差の形成=「職工成金」出現
 - ⇒産業の二重構造へ

二重構造	もの形	成			
19	14年		19	32年	
規模(職	一日		規模(資	年間	
工数)	賃金		本金)	賃金	
(人)	(銭)		(百円)	(円)	
5-10	40	100	-1	174	100
10-30	37	93	I-5	202	116
30-50	35	88	5-10	223	128
50-100	36	90	10-20	257	148
100-500	36	90	20-50	304	175
500-1000	39	98	50-100	363	209
1000-	43	108	100-500	453	260
			500-1000	534	307
			1000-5000	566	325
			5000-	67 I	386
亚杓	38	a s	亚杓	433	2/10

(武田晴人『日本経済史』 p 216)

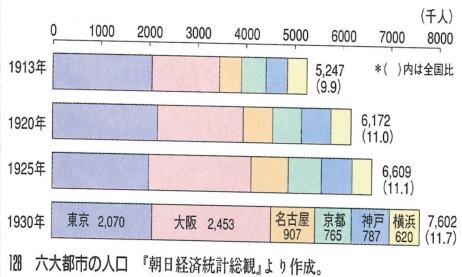
時期的には問題があるが、大戦前の賃 金のありかたと、30年代のあり方の 対比がよくでている。

都市中心の社会へ

- ◎工業化社会の到来=都市人口の増大
 - ①労働者(とくに男子・熟練工)
 - ②ホワイトカラー労働者(サラリーマン)
 - ③高学歴社会⇒学生などの若者
- ◎都市型社会の到来
 - ①新しい生活様式の導入
 - 文化住宅・アパート・電気ガス水道
 - 電気の使用量の急増=「明るくなる」日本
 - ②郊外型住宅=鉄道にそって都市の膨張
 - ③学歴社会の本格化



く)が着実



高学歴社会の本格化

- ①サラリーマンなど新中間層の増加⇒管理的・事務的職業の増加
- ②高等教育機関の整備・増加 大学・高等学校・専門学校 ⇒しだいに飽和状態に (中等教育は日清戦争後急増)
- ③都市知識人(「読書人」)の増加 =マルクス主義などの隆盛
- ④学歴が俸給に直結 出身校によって俸給が大きく異なる

	十五銀行	山口銀行	満鉄	東京電灯	住友系	古河系	三井鉱山
東京帝大	60	80	84	75	80	78	50
京都帝大	60	80		75	80	78	50
帝大理・エ					85-90	100	60
東京商大	60	70	84	75	80	78	40
神戸高商	55	70	76	70	70	75	
各地方高商	50	60	70	60	65	68	
慶応大学	50	65	76	60	65	65	35
早稲田大学	50	60	76	60	65-70	65	35-40
明治大学	45		76	60	60	60	
立教大学	45			55	45-55	60	
法政大学	45		76	55	45-55	60	
専修大学	45			55		4	
明治学院	45			55	45-55		
各種専門学校	Ż	55	70		60		
各工業高校				60	70	68	40
各商業学校	28-30		33-38	35			
中学校	25	35	30	35	35	30-35	20

1920年代、都市の風景

サラリーマンたち町中を闊歩する洋装の



の職業と言われた。 交換手(下)は女性の憧れバスガイド(左)や電話



三越百貨店(左) 浅草(右)と

鉄道と膨張する大阪



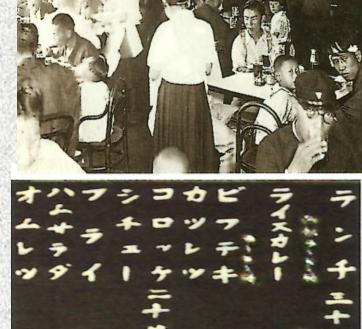


私鉄の集客のためさまざまな事業が進められた。宝塚歌劇団(上)有馬温泉の開発(下)



池田室町住宅。最初に手がけられ た郊外型住宅(1910)





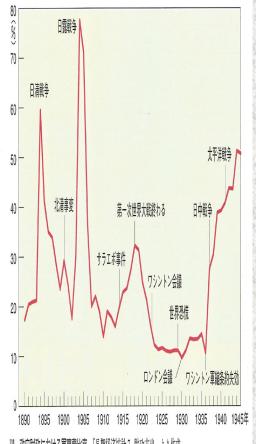
ターミナルにはデパートが建 てられた。阪急百貨店8階の 食堂と当時のメニュー

大戦景気が変えた日本 「双子の赤字」の解消と軍事費の増大

- ①第一次大戦前の日本財政
- ・貿易収支と財政の「双子の赤字」状態
- ・他方での軍拡、積極財政の要求
- ・日露戦費など大量の対外累積債務 ⇒外国からの借り換えで対処
- ②大戦景気…貿易好調・対外投資の増加 税収増…所得税・法人税中心に (税収での工業国化・都市化)
- ③「双子の赤字」解消と財政の好転、実現
- 4)政府…軍拡と積極財政の実施
- ・軍事費とくに海軍建艦費に投入
 - ⇒軍事費の比率は予算の約1/3に
- ・鉄道建設・高等教育などへの投資

|第一次大戦期の国際収支(単位100万円)

		貿易収支			貿易外収支			正貨 保有	80 日露戦争 1
Section Section		輸出	輸入	差引	受取	支払	差引	体	70 — 日高戦争
PERMITTED SELECTION	1914	591	596	△ 5	187	199	∆ 12	341	60
STORY S	1915	708	532	176	255	250	5	516	
200 miles	1916	1,127	756	371	453	614	Δ 161	714	
30,000,00	1917	1,603	1,036	567	686	615	71	1,105	
SCHOOL STANS	1918	1,962	1,668	294	953	896	57	1,588	20 世界恐能 10 —
	1919	2,099	2,173	△ 74	1,212	745	467	2,045	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
N 0.00 CO.	1920	1,948	2,356	△ 408	1,364	1,169	195	2,178	1890 1895 1900 1905 1910 1915 1920 1925 1930 1935 1940 1945年
1000				武田	晴人『	日本経済	齐史』 c	190	政府財政に占める軍事



費支出の割合

大戦景気が変えた日本

工業生産力が農業生産力を上回る(農業国から工業国に)

工業労働者 約100万人→約150万人に

男子の工場労働者(とくに熟練工)の増加 (女工中心の工場からの脱却)

都市人口の急増

サラリーマンと労働者家族⇒都市化の広がり 都市的文化の広がり

電気の使用量の急増=明るくなる日本 取り残される農村と農民たち





補足:見逃されるべき歴史 スペイン風邪(1918~9)

スペイン風邪

①1918年から1919年にわたってヨーロッパをはじめ世界的に流行したインフルエンザ。

パンデミック(世界的大流行)としてこれまで最大

②全世界の人口の30%にあたる6億人、ロ本では2200万人が感染者したとされる

日本でも2300万人が感染者したとされる。

③死者は全世界で2000万人以上、

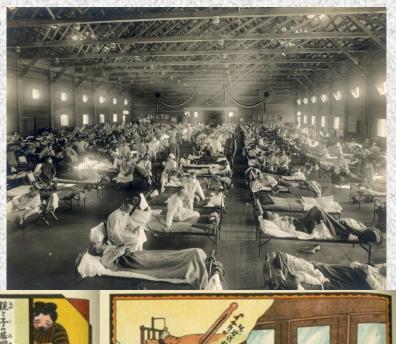
発症からそれほど時間の経過しないうちに 死亡する人も多く出た。

日本では38万人以上死亡との記録がある。

④スペインが最初に感染を報告したことから 当初はスペインかぜとよばれていた。

(「日本大百科全書」より)







VI、おわりに 1920年の社会~不況?高度成長?



1890~1910ごろ 産業革命 1914~1919 大戦(後)景気 1920年代 「不機嫌な時代」 1920 戦後恐慌 1923 震災恐慌 金融恐慌 1927 1929 浜口内閣成立 IO月~世界恐慌の発生 | 1930、| 月金解禁=昭和恐慌へ 1931、12月犬養内閣成立 高橋財政→恐慌脱出 (軍国主義化) 1935 恐慌前の水準への回復

ただし農業恐慌はつづく

ラジオに聞き入る子どもたち

大戦景気が生んだ日本経済のゆがみ

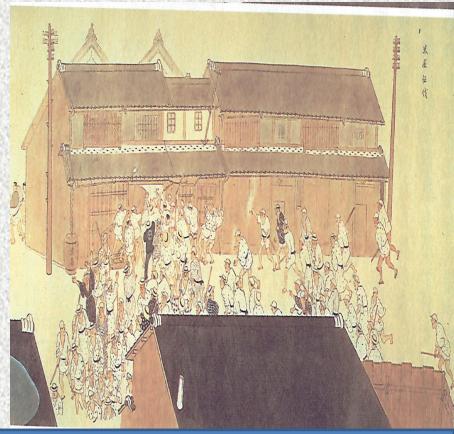
- ①大戦景気=ヨーロッパ退場によるバブル
 - (「温室の中の経済繁栄」)
 - →過剰生産・設備投資・雇用拡大、大量の起業の発生
 - →「投機の流行」・「成金」の発生=長期見通しの不在
- ②日本の技術の水準の低さ=旧式の設備・システムの採用 需要増に対し、雇用拡大や労働強化で対応する
- ③インフレの発生=物価(とくに米価)騰貴と賃金上昇の遅れ 米騒動(1918)
 - →1920年代の不況=物価下落→実質賃金上昇へ
- ④さらに終戦後の急速で割高な事業拡張・積極財政

(熱狂的なバブルの発生1919春~1920/3<mark>)</mark>

大戦後の日本経済

低い生産性・大量負債・賃金負担の大きさ

1920年3月15日、戦後恐慌発生⇒不況の20年代へ



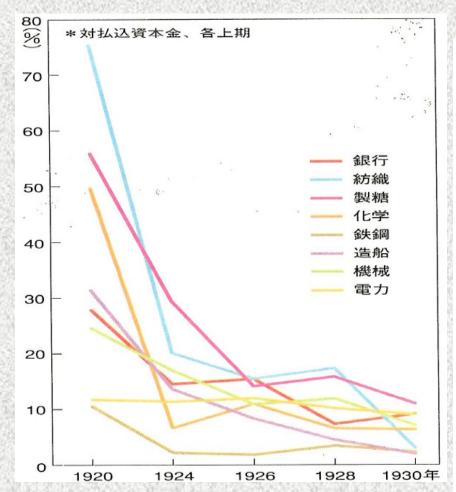
米騒動(1918)

富山県の漁師の妻たちによる米の移出阻止の実力行使は新聞によって全国に伝わり、米の値下げを求める運動が各地で展開された。

「不況の時代」としての1920年代

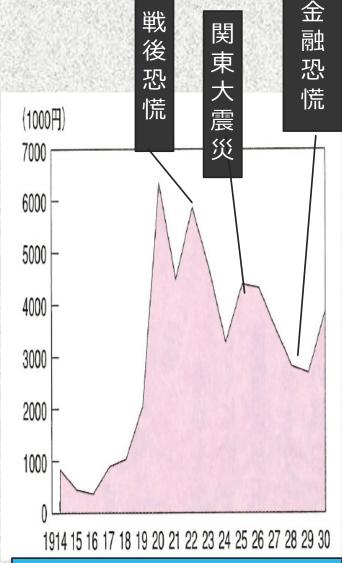
第一次大戦後の経済

- ① 欧米の市場への再登場 ⇒高品質・低価格の製品 (鋼材など)を輸出・供給
- ②アジアでの民族資本成長 中国での反日運動の高まり ⇒輸出不振に
- ③大戦景気下の<mark>過剰投資</mark> ⇒戦後恐慌で<mark>不良債権</mark>化 負債の蓄積
- ④<mark>銀行の高金利・貸し渋り</mark> ⇒資金不足
- 5生産性の悪さ
 - ⇒旧式の施設・労働集約型



部門別利益率:

ほぼすべての産業で暴落がみられる



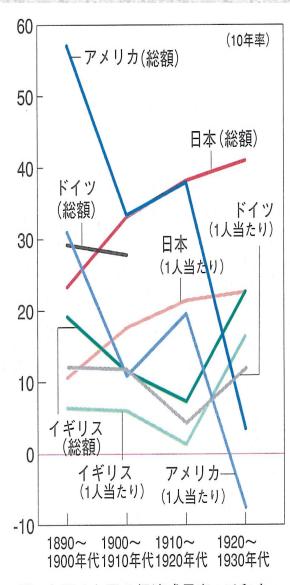
負債(借金)のグラフ

高い経済成長率を支える個人消費

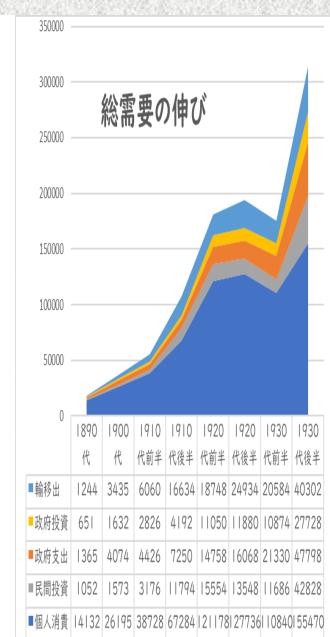
- ①1920年代は世界トップの経済成長率(総額・個人とも)をほこる。
- ②総需要の伸びを支えるのは<mark>個人消費</mark> である。
- ③民間投資は1920年代減少傾向に転じる。
- ④政府支出・政府投資も共に頭打ち状態
- ⇒ただし軍縮の進行・震災需要もあり、
- 基盤整備に中心があったと思われる。
- ⑤輸移出は1920年代後半に持ち直す

1920年代

大戦末期の賃金上昇と大戦後のデフレ=物価下落による実質賃金増が、個人消費を引き上げた。 個人消費が高い経済成長を支えた。

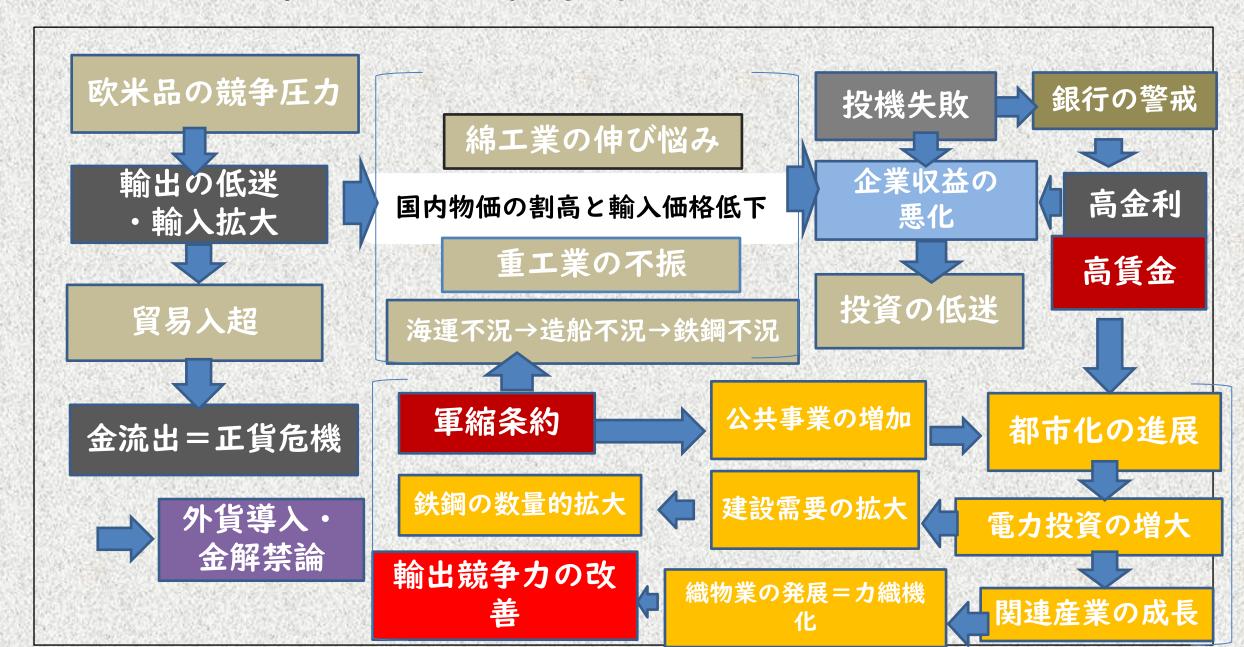


|27 主要4か国の経済成長率 三和良一 『近代日本経済史』より作成。



1920年代の経済構造

武田晴人の説明を元に作成



1920年代。

不景気な時代?!

11 =

数字の変化は少ない 生糸780→795 綿糸763→678 (※)

都市における鉄道関連 事業の発展 「文化」「消費」の伸 長に注目

凡例 <製品名>

赤系統:重化学工業

緑系統:綿系統工業

黄系統:絹系統工業

<数字>

ゴチ:大きな変化

着色:顕著なもの

<備考>

出:輸出関連

入×:輸入停止

内:内需関連

		19	19	1929		
	出・内	生糸	780 出	生糸	795 出	金
158	出	綿糸	763 出・内	鉄道	750 都市・インフラ	糸
152	インフラ	小幅織物↓	453 内	綿糸	678 出・内※	金
149	軍需	石炭	442 旧エネ	電力	658 新エネ	
92	内	鉄道	401 インフラ	広幅織物	526 出	14
80	旧エネ	小幅絹織物↓	397 内	鉄鋼	378 軍縮?	生
70	内	海運↓	378 好況	清酒	301 内消費	H
69	入	鉄鋼	372 入×軍	石炭	245 旧エネ	石
64	入	軍工廠	315 軍需	軍工廠	208 軍縮 🕢	
57	新エネ	船舶↓	312 好況出軍	製紙	190 <mark>内文化</mark>	1
52	内	広幅織物	312 出	↑印刷	186 内文化	
49	内消費	清酒	240 内消費	毛織物↓	176 内消費 /	学
29	入	電力	183 新エネ	製糖↓	158 内消費	学清
29	内文化	製紙	151 内文化	↑小麦粉↓	146 内消費	J.
28	内消費	毛織物	122 内消費	肥料	132 内農業	↑
26	内文化	肥料	111 入×化農	↑広幅絹織物↓	130 出	
25	内消費	製糖	104 内消費	↑工業薬品	115 化学	>
	入化農	↑撚糸	101	↑製材↓	112 内震災?	
20	The second second second	非鉄金属	98 入×軍	非鉄金属	102 軍	
10.1	THE STREET STREET, STR	LANGE OF THE PARTY	MANAGEMENT PROPERTY AND ADMINISTRATION OF STREET	STREET, STREET	THE RESERVE WITH STREET STREET, STREET	

電力の急伸

エネルギー面における石 炭との地位の交替

軍縮の影響も

鉄鋼も伸び悩み 船舶はランク外に

都市化・大衆消費社会の誕生?

電気機械

206 重丁

化学肥料の着実な 増加=農村の変化

大戦景気

1920年代・軍縮

昭和恐慌・満州事変・日中戦争へ

1920年代の「成長」~現代日本が見え始めた

産業→社会構造→ライフスタイルの変化 豊かな個人の出現=大正デモクラシーの背景

- ①農村⇒都市(都市への大移動)
- ②軽工業⇒重化学工業へ
- ③蒸気力⇒電力)
- ④女工・雑業労働⇒男子熟練工、サラリーマン
- ⑤知識層の広がり←中・高等教育の普及
- ⑥大衆社会化=<mark>イギリスよりもアメリカに</mark>



1930年代

- ・個人消費のおちこみ⇒比率減少(個人の弱体化)
- ・政府支出・政府投資急伸(経済の軍国主義化)⇒再び、国家中心=戦争の時代へ



参考文献

武田晴人「日本経済史」 「帝国主義と民本主義」 海野福寿「日清・日露戦争」 江口圭一「二つの大戦」 坂野潤治「近代日本の出発」 三和良一「概説日本経済史」 大石嘉一郎編「日本産業革命(上・下)」

日本史図表(山川出版・帝国書院・浜島書店)・

日本経済史

武田晴人 著 Takeda Harubito



有受関 yuhikaku

武田晴人「日本経済史」(有斐閣 2019)